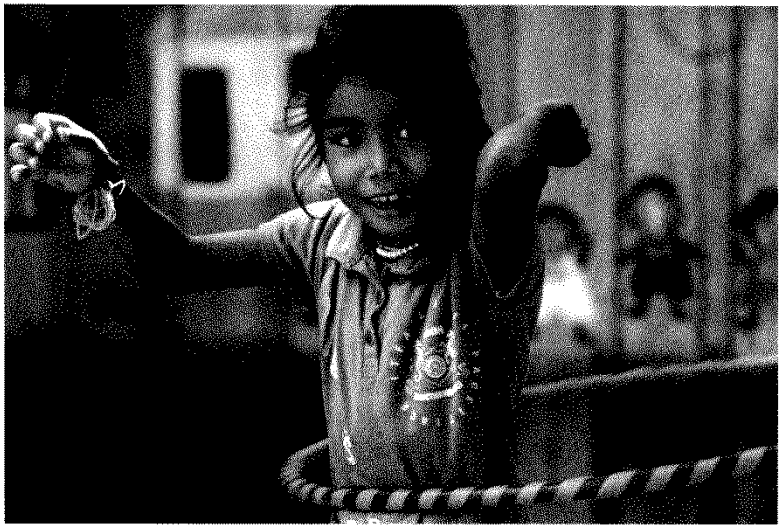
平成 19 年 12 月 5 日発行（年 4 回 3・6・9・12 月 5 日発行）通巻 84 号

特定非営利活動法人
幼い難民を考える会
CARING FOR YOUNG REFUGEES

子どもたちの明日
Children, Our Future

2007 年 12 月 NO.84



バンキアン地区保育所 ©小林正典

目 次

② 特集！2ヶ所の保育所が新規オープン！
④ 韓国からの支援
⑤ スマトラ沖地震、タイ津波被災地支援を終了
⑥ CYR 愛知支部誕生
⑦ カンボジアスタディツアーに参加して / 国内活動：朝日生命保険相互会社
⑧ ～特別寄稿～「優しさとの出会い」フォトジャーナリスト 高橋智史氏

幼い難民を考える会（CYR）は、難民となったカンボジアの子どもたちがけんめいに生きようとする姿に触発され、1980 年に組織されました。子どもたちが心身ともに健全に成長し、その親たちが人間らしい生活環境のもとで自立できることが、難民を出さない平和な社会につながることを信じ、復興をめざすカンボジアで活動を続けています。

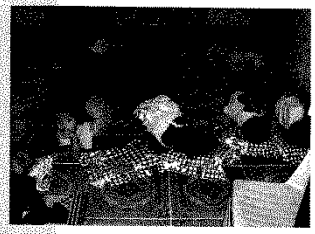
子どもが安心して過ごせる場所を

2ヶ所の保育所が新規オープン！

2007年7月、現地NGO「ケマラ」と協力し、都市貧困層が多く住む地域に、「コー第1村保育所」、「第2村保育所」をオープンしました。それぞれに3歳から6歳までの子どもたち43名、35名が元気に通っています。
新しい保育所で起こったニュースをお伝えします。

ニュース1. オープン初日

7月25日、保育所の開所式が行われました。参加したのは、保護者50人、子ども50人、委員会のみなさん20人、先生とケマラのスタッフなど、総勢145人です。この日は、CYRが支援してきた別の2保育所の子どもたちも訪れて、祈りの踊りを笑顔で披露してくれました。
ケマラ代表と運営委員長のユー・イアンさんは、「この村に保育所を作ってくださったみなさん、ありがとうございます。」と感謝の気持ちを語りました。



お昼寝 第2村保育所

ニュース2. 委員会の結成

将来、
地域の中で保育所を運営していくために、地元の人から成る5つの委員会が立ち上がりました。

1. 技術グループ： 保育活動やプログラムについて考え、子どもが精神的・体力的に成長できるよう配慮する。
2. 安全と健康グループ： 安全を守ったり、ヘルスセンターと協力し合ったりして、子どもの健康を考える。
3. 運営グループ： 地域、国内、海外から支援者を探す。
4. 経済グループ： 保育所の収入、支払いの報告書を作る。
5. 情報・宣伝グループ： 村人や保護者などに、保育所の宣伝をする

ニュース3. 外遊具3点セットができあがり！

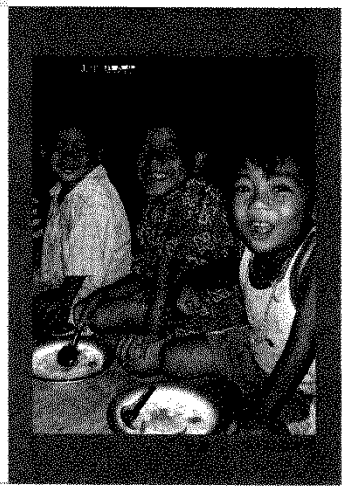
9月14日、コー第1村保育所に、ブランコ・すべり台・シーソーが完成しました。子どもたちが楽しく遊ぶための大切な遊具です。設置する場所や色などを、ケマラ担当者や保育所の大家さんと話し合い、時間をかけて準備が進められました。連日35度を超す暑さの中での作業は、なかなか大変です。カンナかけなど、作業を手伝ってくれる人を地域からも頼みました。
完成した次の日、保育所の様子をのぞいてみると、休みの日にも関わらず、近所の子どもがやってきて遊んでいました。今では仕上げのペンキも塗り終わり、保育所の子どもたちが楽しそうに遊ぶ姿ですっかり活気づいています。
※遊具の設置は「外遊具募金」により実施しました。詳しくは同封の募金チラシをご覧ください。

すべり台で遊ぶ コー第1村保育所

ニュース4. 保護者の声

保育所に通うようになって子どもたちは・・・？

「よく話すようになった！」
「歌えるようになった！」
「あいさつが出来るようになった！」
「給食を食べて太った！」
「英語を覚えた！」



ニュース5. 都市貧困層の家庭調査報告書が完成

CYRは、この事業を開始する前に、都市貧困層の生活状況や子どもの様子について、家庭訪問を通じた聞き取り調査を行いました。調査結果をまとめた報告書が完成し、ホームページに全容を公開しましたので、ぜひご覧ください。
URL：http://www.cyr.or.jp/activity/childcare/cityreport.pdf

報告書には、調査者が2006年5月から2007年3月までに、延べ19回に渡り、地域に住む186家族を歩いた結果が盛り込まれています。ご希望の方には、郵送いたします。
事務局までお問い合わせください。

韓国からの支援

CYRの活動に賛同して、韓国チャン・モンテッソーリ協会会長の
ヤン・スーン・チャンさんが、韓国の幼稚園や関心のある人々に、
子どもたちの環境を整えるための支援を呼びかけてくださっています。
チャンさんからのメッセージをご紹介します。

『幼い難民を考える会』（以下CYR）が難民キャンプで保育所を開設し、保育者養成、大人の技術訓練などの活動を開始したことを私が知ってから、20年以上の年月が経ちました。そして3～4年前、プノンペン市の貧しい人々が住む地域の子どもたちのために、CYRが保育所を開設したことを知りました。これは、カンボジア国外へ向けられた“緊急な呼びかけ”でした。何の罪もない無垢な子どもたちには、特別な関心と支援が分け与えられなければなりません。しかし、私はこの緊急の叫びを深刻に自分のこととして受け止めませんでした。

先週、アメリカで開催された教育者会議に参加した時、カンボジアの子どもたちの現状を知らない人がたくさんいることに気が付きました。私は、9月にカンボジアで撮影した何枚かの写真を見せました。人々はびっくりして、悲しみと同情の気持ちを表しました。何人かは、カンボジアの子どもたちを考える活動に今から参加したいと言いました。

私は、いつも自分の生徒に“もし、幼い子どもたちが周囲の環境から膨大な情報を吸収している時期に、あなた方が子どもたちの命をケアしないのであれば、プロフェッショナルな先生ではありません。すぐに先生を止めるべきです。”とアドバイスしています。

しかし、このようにアドバイスしている私自身、“日本には、長く寄付をしてきた人たちがたくさんいるのだから、その人たちにお任せすれば良い。”と思っていました。これは、9月までの私の言い訳でした。

今年9月、私は同僚を連れて、ついにカンボジアを訪れました。3日間で6ヶ所の保育所を案内され、生まれつき美しい子どもたちに会いました。欲張りでもなく、だますこともなく、怒りや不満を見せない子どもたちに。そして、たった2回の食事だけで、この子どもたちを幸せにすることができることを理解しました。

関口さんと山極さん（注）が、“もっと資金があれば、もっと多くの村に子どもたちの場所が作れ、もっと多くの子どもたちが、より良い環境で生活できる”と私たちに説明してくれたことに、全面的に同意しました。

私たちは、カンボジアでの視察に基づき、以下のことを決断しました。

1. 韓国の6幼稚園（主に園長）が、2007年11月から2008年10月まで、CYRの6保育所を支援します。
2. 将来の新しい保育所のため、6名が寄付をします。
3. 先生・子ども・保護者も、CYRの計画に沿って支援を希望します。

CYRからどんな報告書も期待しませんが、この韓国からの寄付を、関口さんと山極さんが管理し、責任を持って使っていただけることを期待しています。寄付の使い道は、カンボジアで保育所を運営し、子どもたちのために必要なことであれば、どんなことにでも提供できるよう、上記のお二人に委任します。

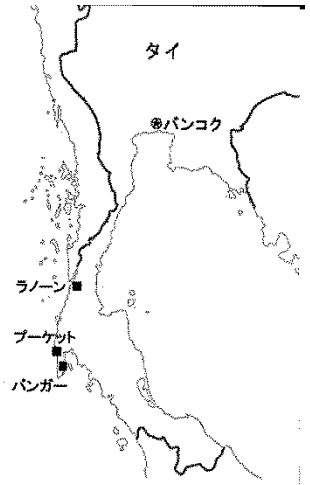
注）関口晴美（CYRカンボジア事務所長）、山極小枝子（CYRカンボジア事務所保育担当）

ヤン・スーン・チャン

●プロフィール●

ヤン・スーン・チャン氏
1972年から3年間、上智モンテッソーリ教員養成コースと、うめだ「子供の家」で、モンテッソーリ教育を学ぶ。（当時、山極は実習受け入れクラス担任）。
その後、アメリカとイタリアでモンテッソーリ教育を学び、モンテッソーリ教育修士・教育学博士号取得。現在は、チャン・モンテッソーリ教育協会会長、韓国でモンテッソーリ教員トレイナー、アメリカモンテッソーリ協会国際平和委員会メンバー。
※ モンテッソーリ教育は、幼児教育の方法論。

スマトラ島沖地震、タイ津波被災地支援を終了



2004年12月、インドネシア・スマトラ島沖地震により大津波が発生。CYRは、タイ南部ラノーン県と近隣の貧困層が多い地域で、被災した子どもたちの心のケアを目的に支援活動を続けてきました。今年7月、関口晴美、山極小枝子がタイへ出張し、最終評価を行いました。活動と成果をご報告します。

活動1

タイ「サハタイ財団」と協力し、スックソムラン幼稚園に外遊具10基を設置しました。
その後、使用状況をモニタリングし、フォローアップを行いました。

☺ 成果

幼稚園の子どもたちの遊びが広がりました。

活動2

タイNGO「ラバットバイ」が活動する6ヶ所の保育所へ、保育者研修費用・教材・移動図書箱を支援し、活動のフォローと保育のアドバイスを行いました。

ラバットバイ：被災地の保育所や学校でワークショップを行い、人形劇・教材づくりなどを通じて子どもの心のケアにあたる。

☺ 研修を受けたことがなかった保育者が、子どもとの接し方、人形劇、読み聞かせなど学ぶ機会となりました。

☺ ラバットバイ、教育関係者、県社会福祉局の間で協力が強化され、さらに保育者間のネットワークが作られました。

☺ ラバットバイが定期的に保育者と話し合いをした結果、保育者のニーズに基づく人的資源を探し、継続的な活動へつなげる体制ができました。

☺ 保護者グループが、人形づくり、移動図書館などの活動を通して、子どもへの理解を深めました。

☺ 継続的に収入向上につながる活動が実施されました。

☺ 保育所で、子どもたちの遊びが充実しました。

活動3

新しくできたスックソムラン保育所は国道に面しているため、保護者からの要請を受けてラバットバイと共に垣根の設置をしました。

☺ 保育所には、2歳半から4歳までの子ども32名が登録。
子どもが安心して、園庭で遊べるようになりました。

☺ 保護者が安心して子どもを保育所に通わせることができるようになりました。

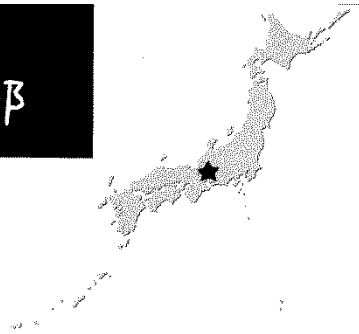
スックソムラン保育所

今後の予定

ラバットバイは、被災地保育所のネットワークづくり、研修システムの確立、人的資源の確保と共に、資金繰りに取り組んでいます。タイ社会では、経済的な状況・NGOの組織・人材もしっかりしています。資金確保についても、現地のNGO間のネットワークなどを通して自分たちで情報を得て、実践してきています。CYRは、今回の最終評価でタイ津波被災地の支援活動を終了し、今後は、ラバットバイから活動報告を受けます。

※ホームページ関連記事　http://www.cyr.or.jp/cyrblog/index.php?e=182

誕生!!
CYR 愛知支部



2007年9月29日、幼い難民を考える会あいち（CYR-A）の設立総会が開催され、任意団体として発足しました。愛知県を中心として東海三県（愛知・三重・岐阜）で活動を推進します。

● メンバー紹介 ●

支部長
高木 正彦

昨年から、ボランティアとして東海三県で活動を推進してきましたが、そこで感じましたことは、愛知・東海地区には、多くのCYRの会員や支援者の方が、永年多岐にわたる支援をされていることです。もっときめ細かく密度の高い活動を進めるためには、この地域での活動拠点が必要とされていると感じましたので、CYR-Aの設立を提案しました。

今後は、CYRと緊密な連携を図りながら、皆様のご意見をいただき、より地域に密着した活動を展開したいと考えております。無理せずに、歩みは遅くとも着実な活動を進めてまいります。スタートにあたり、会員の皆様との勉強会を定期的に実施することから始めたいと思いますので、多くの方々のご参加をお待ちしています。

横井 雅子

いよいよCYR-Aの活動が本格的にスタートしました。どなたでも気軽に参加できる活動を展開していきますので、ぜひご注目ください。私自身、国際協力に関心を抱いたのが10歳の頃だったので、個人的には多くの子どもたちにCYRやカンボジアを伝えたいと思っています。背伸びしすぎず、できることを精一杯やっていきます！！

芝田 洋子

2年前にCYRのカンボジア事務所を訪れ、活動を見学させていただきました。ご縁があって、同じ日に見学に来ていた方と結婚し、今春名古屋へ転居してきました。CYR-Aとしての活動が開始され、実際に活動に協力できる機会をいただけたことを、夫婦でうれしく思っています。

長谷川 尚子

昨年、愛知で開催された国際協力イベント「ワールド・コラボ・フェスタ」にボランティアとして参加した際に、「私にも何かできることがあるかも知れない」と感じました。その後、支部長の高木さんの情熱に促されるようにして、CYRあいちの設立に向けて少しずつお手伝いするようになりました。はじめての総会の日、色々な方たちにお会いし、刺激を受け、ボランティアを自分の人生の大切な一部として前向きに参加していこうと決心しました。このような活動は、「焦らず、たゆまず、腰を据えて」やっていくものではないかと思っています。

幼い難民を考える会あいち（CYR-A）
住所：名古屋市中区栄一丁目23番13号伏見ライフプラザ12階なごやボランティアNPOセンターロッカー番号40
ホームページ： http://www.cyr-a.com/index.html/

－カンボジア、スタディツアーへ参加して－

ひとりの地球人、人間としてしなければならないこと。

自治労福岡県本部ユース部長
出口　厚志

大縄とびで遊ぶ　コー第1村保育所

9月17日～23日の1週間、自治労福岡県本部ユース部では、3回目となるカンボジアスタディツアーを実施しました。参加者の人材育成、国際交流、国際貢献、平和学習を目的とし、CYRの協力で現地での活動を行いました。

雨期でしたが、大きな天気の崩れもなく、ツアーは順調に進められました。保育所支援として、遊具のペンキ塗りや、子どもたちへの教育とふれあいの一環として、折り紙や大縄とびをしました。また、カンボジアではゴミを拾う習慣がないため、子どもと一緒にゴミ拾いを行い、環境保全の教育もできました。私たちは、これまでの取り組みとして「みんなで布チョッキン（※）」を行ってきましたので、今回は切った布で完成した人形を贈呈し、子どもたちにとても喜んでもらえました。

カンボジアの人たちは親切で、心温まる想いを何度もしました。子どもの無邪気な笑顔に触れると、心が癒され、私たち日本人が忘れかけている豊かで純粋な心を思い起こさせてくれました。今回の経験により、改めて日本の豊かさを実感しました。それは、現地の状況が想像以上に酷かったともいえます。ひとりの地球人、人間として何かをしなければならないと強く感じました。私たちが見てきたカンボジアを1人でも多くの人に伝え、様々な取り組みを通じて引き続き支援を行っていきたいと思います。

※カンボジアの子どもたちのために、ボールと人形をつくる活動

国内活動　－ありがとうございます－

CYRカンボジアのプロジェクトは、さまざまな日本の活動に支えられています。

企業

朝日の月醸（さと）金

朝日生命保険相互会社
CSR推進室長　工藤 良一

朝日生命は、来年3月に創業120周年を迎えます。その創業以来、脈々と受け継がれている経営の基本理念として「まごころの奉仕」というものがあります。

もともと生命保険という相互扶助の精神に立脚したビジネスの性格上、創業当時から社会貢献という意識が社員の間にも浸透していたようです。戦後、10余年が経ち、戦乱期の苦難を乗り越えかけた頃、戦後当初の緊張感は薄らいできました。

そこで、もう一度当時に立ち戻り、全社一丸となって仕事に邁進するとともに、経営理念である「まごころの奉仕」を更に実践して行こうという趣旨で、創業記念月である7月を「朝日の月」と制定しました。そしてその7月に、全役職員が募金をして、社会福祉に活躍している団体に寄付をおこなったのが、「朝日の月」醸金のスタートでした。

それから半世紀が経過した今年、第50回目を迎えました。「幼い難民を考える会」には、平成15年から寄付をさせていただいております。当時、会社に送られてきたニュースレターが担当者の目に止まったのがきっかけでした。

以来、毎年、峯村事務局長様には活動報告を兼ねて当社に足を運んでいただいております。私どもも、そうして直接お役に立っていることをお聞きして、担当者として本当にうれしく思っています。これからも出来る限り、ご支援をさせていただきたいと思います。

隣の家の赤ちゃんとサウ・パニーさん

『優しさとの出会い』

フォトジャーナリスト　高橋 智史

カンボジアに来てから半年が過ぎた。いくつかの取材をしてきた中で、強制移転をされてしまったスラムの人々との出会いは、とても印象深いものだった。

プノンペンでは近年の都市開発に伴い、スラムの人々が都市部から郊外に移転させられるケースが増え、昨年にも大規模な移転が実施された。

2006年、6月6日、午前3時、プノンペン最大のスラムであった「バサックスラム」に住む、およそ1800世帯の人々が、プノンペンから17キロ離れた僻地に強制移転させられた。移転先では当初、インフラの整備がまったくされておらず、多くの人々は元々の仕事を失い、安全な水や食料を得る事も難しくなってしまった。強制移転から1年半になる今でも、人々の状況はあまり改善されていない。

そのような移転先で取材をしている時に、ある家族と仲良くなった。「バサックスラムに居たときは夫と大工の仕事をしていました」と話してくれたサウ・パニーさん(38)一家だ。パニーさんは、夫と一人息子とおばあちゃんの3人家族で、他の人々と同様に小さな手作りの小屋に住んでいる。現在は夫一人が、プノンペンまで大工の仕事をしにいき、何とか家庭を支えている。

何回か取材を重ねていたある日の事だった。パニーさんが一つの薬を見せてくれた時があった。ARVと呼ばれるその薬は、エイズの発症を抑える薬だった。

夫も感染が判明し、1年ほど前から夫婦で薬を飲み続けているという事だった。

横で話しを聞いていたおばあちゃんの顔に一瞬、不安感が読み取れたが、隣の家の赤ちゃんを我が子のように優しくあやし、「この子、お父さんに怒られたみたいだから」と話すパニーさんの表情はとても穏やかだった。

社会変動の煽りを受け続け、度重なる苦境を突きつけられながらも思いやりを忘れない、カンボジア女性の心の強さを彼女から感じた。

「私たちの所に何度も来てくれた人は始めて。ここの状況を日本の人々に伝えてください」外国から突然来た私に、嫌な顔一つせず、いつも家に招き入れてくれたサウ・パニーさん一家。最後にかけてくれたその言葉に、胸が急に熱くなった。

●プロフィール●

高橋 智史 氏（たかはし さとし）

フォトジャーナリスト。1981年10月6日生まれ。秋田市出身。高校卒業後、日本外国語専門学校国際ボランティア学科入学。その後、日大芸術学部写真学科で写真を学んだ。カンボジアを主に東ティモール、アフガニスタン、スマトラ沖地震津波被災地などのアジアの問題、人々の営みを取材し雑誌、写真展などを通じて作品を発表。今春、カンボジアのプノンペンに移り住み、取材活動を続けている。秋田魁新報社「素顔のカンボジア」でフォト＆ストーリーを連載中。

ＣＹＲの活動をご支援ください

年会費　正会員￥10,000　学生会員￥3,000　団体会員￥30,000

下記の口座にご送金ください。

郵便振替　No.00110-8-36227（特活）幼い難民を考える会　銀行振替　三菱東京UFJ銀行六本木支店（普）No.1351747
特定非営利活動法人　幼い難民を考える会

※CYRは認定NPO法人です。5,000円を超えるご寄付は寄付金控除の対象となります。

特定非営利活動法人
幼い難民を考える会
CARING FOR YOUNG REFUGEES

〒106-0046 東京都港区元麻布3-2-20 丸統麻布ビル2F
TEL：03-3796-6377　FAX：03-3796-6399
Email：info@cyr.or.jp
URL：http://www.cyr.or.jp

子どもたちの明日 84号

◆発行日：2007年12月5日
◆発行人：深水正勝